

世界最強の
真祖竜に
転生しました!

～でも目指すのは
自由気ままな暮らしです～

2

Hajime Nanba

難波一

Illust. 蓮禾

Sekaisaikyou no
sinsoryuu ni tensei shimashita

登場人物
紹介

ヴァレン

“色欲”を司る魔王。
とある目的のために、
暗躍を続けている。

ブリジット

ハズレスキルを授かったせいで、
辺境へ追放された貴族家の少女。
追放先を楽園にしようと奮闘中。

フレキ

外見は巨大な犬だが、
実際は伝説の魔獣である
フェンリル族の王子。

リュナ

アルドを『兄さん』と慕う
黒ギャルスタイルの少女。
その正体は『咆哮竜』と呼ばれる
強大な魔竜。

アルド

本作の主人公。
異世界の最強種“真祖竜”へと転生し、
人間の姿で
自由気ままな日々を楽しむ。

プロローグ 歪む運命、迫る超常

溪谷を、二つの影が駆け抜けていた。

赤黒い夕陽が岩肌を染める中、傷だらけの青年と少女が、息を切らしながら岩棚を走る。
「ハアツ……ハアツ……クソツ、なんでこんな……！」

先頭を走るのは、黒髪を後ろに流した剣士風の青年——レオ・ゼクシア。
右手には刃こぼれした剣。肩口からは血が滲んでいる。

「ごめん、レオ……！ あたしが……引き受けた依頼なのに……！」

その後ろを必死に追うのは、明るい茶髪を短く結んだ少女——マリン・レイフォード。
彼女の腰のホルスターでは、魔導銃が不安げに揺れていた。

「謝るな、マリン！ 誰のせいでもない！」

レオは振り返らずに叫ぶ。

「あんな想定外の化け物、誰だって無理だ……！」

背後から、地鳴りのような咆哮が迫る。

ドガン！

岩壁を砕き、巨大な影が渓谷へ飛び込んできた。

グリュプス。鷲^{わじ}の上半身に、ライオンの下半身を持つ強大な魔獣。

しかもこの個体は、通常とは比べものにならない異常成長体だった。鋼^{はがね}のような羽、鎌^{かま}じみた前脚。まともに攻撃を食らえば、人間など一撃で叩き潰される。

「こつちだ……！ マリン、ついてこい！」

レオは細い岩道へと駆けだす。

マリンも恐怖に喉^{のど}を詰まらせながら、その背中を必死に追った。

「——追いつかれる……！」

それでも足は止めない。今、レオが前を走っている。

彼が守ろうとしてくれている。なら、自分も隣^{となり}にいないなければならない。

そんな死に物狂いの逃走の先で——二人は、奇妙な光景を目にした。

その先の開けた場所に、一人の男が寝転んでいたのだ。

顔の上には分厚い黒革^{くろかわ}の本。

まるで読書中に昼寝でも楽しんでいるかのように、あまりにも無防備に。

「な、何してんだこの人……!？」

レオは急停止し、すぐさま男へ駆け寄る。

「おい、そのあんた！ 逃げろ！ ここは危ない！」

ふわり、と風が吹いた。

男は顔の本を指でどけ、襟元^{えりもと}に掛けていたサングラスを慣れた仕草でかけ直す。

胸元^{むなもと}のはだけたシャツ。肩に羽織ったロングコート。赤メツシュの入った黒髪が、夕日にゆるく揺れていた。

男はゆっくりと起き上がり、レオとマリンを眺める。

「へえ……そりゃ面白そうだ」

妙に艶やかな声だった。

サングラス越しの視線に、二人の背筋がぞくりと栗立つ。

「冗談言ってる場合じゃない！ グリュプスがすぐそこまで来てるんだぞ！」

「あ、あたしたちが食い止めるからっ！」

マリンも震える声で訴える。

だが男は、逃げるでも構えるでもなく、ただ二人を見て口元を緩めた。

「——いい風だな。恋^{こい}を運んでくるような……な」

（……なんなんだこいつ）

レオが苛^{いらだ}立ちと恐怖を同時に覚えた、その直後。

ドン！

雷鳴じみた咆哮とともに、巨大なグリュプスが舞い降りた。岩が砕け、土煙が舞い上がる。

死が、目の前に立っていた。レオは咄嗟に男の前へ飛び出す。

「下がれ！」

マリンも魔導銃を抜き、震える手で構えた。

「絶対、守るから……！」

だが、男はそんな二人を前に——ただ薄く笑っていた。

まるで、自分が危機の中にいることなど理解していないかのように。

あるいは、この絶望的な状況さえ楽しんでるかのよう。

グリュプスが翼を広げる。黄金の眼に殺意を滾らせ、魔獣は宙へ舞った。

「レオ、いくよ！」

「——ああっ！」

マリンの魔導銃から蒼白い魔力弾が連射される。

だが、グリュプスは羽ばたきひとつでそれを弾いた。

「来るぞ！」

巨大な鉤爪が迫る。マリンの照準は追いつかない。

——殺される。

彼女の本能がそう告げた瞬間、レオが身を投げ出した。

ガシィィイツ！

鉤爪が肩を掠め、血飛沫が闇に散る。

「レオ！」

マリンの悲鳴が響く。レオは苦痛に顔を歪めながらも、剣を構えたまま立ち続けた。

「だ、大丈夫だ……！ お前だけは……絶対、守るから……！」

（……バカ……そんな顔、しないでよ……！）

マリンは震える手で魔法陣を描き、レオの傷へ治癒の光を注ぐ。

『「治癒」——！』

だが、間に合わない。

グリュプスはすでに、次の一撃のため翼を広げていた。絶望的な影が二人を覆う。

そのときだった。すつ、と。二人の前に、男が立った。

男は、傷ついたレオに寄り添い、泣きそうな顔で癒し続けるマリンを見た。

その姿に、口元がにやりと歪む。

「……最高だ」

誰にも聞こえぬほど小さな呟き。

だが、その響きは、まるでレオが傷ついたことすら楽しんでいるようだった。

マリンの背筋に寒気が走る。レオもまた、男へ警戒の眼差しを向けた。

男は余裕の笑みのまま、黒革の本をぱらぱらとめくる。

「……いいモン見せてもらった礼はしなくちゃいけないよな」

コートを翻し、男は軽やかに跳躍した。

グリュプスの死の爪が振り下ろされる。だが、男はそれを舞うようにかわす。

そしてなんの躊躇いもなく、右手の人差し指と中指、その二本だけで、魔獣の額に軽く触れた。

「――『運命交叉』」

低く、静かな声。

瞬間、見えない力の奔流が渓谷を揺るがした。

空気がざわりと震え、肺の奥に異物が入り込んだような感覚が、レオとマリンを襲う。

「……な、に……これ……?」

次の瞬間。

ドゴンッ!

横合いから、もう一体のグリュプスが凄まじい勢いで突進してきた。

潤んだ目。震える翼。甘ったるい奇声。

二体の魔獣は空中で絡み合い、もつれ、そのまま崖へ――

ズシャアアアアアッ!

岩壁を削りながら転げ落ちていく。土煙と砕けた岩片が渓谷を埋め、轟音だけが長く響いた。

レオとマリンは、呆然と立ち尽くす。

何が起きたのか。どうして助かったのか。何ひとつ分からない。

ただ、この男がした“何か”が、グリュプスの運命を捻じ曲げた。それだけは理解できた。

男はふわりと着地し、コートの裾を払う。

「……ククク」

心底満足げな笑みだった。まるで、自分の仕事に百点をつけた子どものような無邪気さ。

だが、その無邪気さこそが、何より不気味だった。

「た、助けて……くださって、ありがとう……ごさいます……」

マリンが震える声で礼を言う。レオも剣を支えに頭を下げた。

「俺も……礼を言う。助かった」

男は、ゆるりと二人を見る。サングラスの奥から、意味深で底の見えない視線で。

そして、無造作に言った。

「こんな世の中だ。今日一緒にいた相手が、明日も隣にいないぜ?」

二人は息を呑む。

「言いたいことは、言えるうちに言っておけよ。後悔することになる」

それは、別れを予感させる呪いのような言葉だった。

ふわり、とコートを翻し、男は渓谷を去ろうとする。思わず、レオが叫んだ。

「ま、待ってくれ! あんた……あんた、何者だ……!?!」

「ヴァレン……ヴァレン・グランツ」

男は振り返らずに答える。名前、それだけを残して。

そして夜闇の中、牙のように白い歯を見せて笑った。

「——行き先は、フォルティア荒野だ」

その言葉だけを残し、「性欲の魔王」ヴァレン・グランツは、夜へと消えていった。

レオとマリンは、ただ呆然とその背中を見送る。

まるで、深淵を覗き込んでしまった者のように。

——そして、後日。

この渓谷にいた冒険者の少女、マリン・レイフォードはこの世界から——いなくなることになる。物語は、静かに、しかし確実に、次なる運命へと、進み始めていた。

第一章 王都からの召集

俺——アルドは、乾いた笑みを浮かべていた。

フォルティア荒野の中央付近。そこには、どう見てもこの世界の景観から浮いている建物が、堂々とそびえ立っていた。

壁も、屋根も、窓枠も、ついでに煙突まで。何もかもが、やたら綺麗な直方体や立方体の組み合わせでできている。フォルムが妙に幾何学的で、遠目に見ると子どもが積み木で作った家をそのまま巨大化させたみたいだ。

その名も、カクカクハウス。

……いや、我ながら、もう少しマシな名前はなかったのかと思わなくもない。

そんなカクカクハウスの前に立ちながら、俺は過去を思い出していた。

前世では日本のサラリーマンだった俺は、気づけばこの異世界で「真祖竜」なんていう世界最強クラスの竜種に転生していた。

しかし、真祖竜の仲間たちは『怠惰こそ美德』というような価値観で生きていた。そんな生活に飽き飽きした俺は、魔法で人間の姿に変身し、人間として生きることにしたのである。

とはいえ真祖竜は真祖竜。普通なら、もつとこう……空を飛んだり、強敵と戦ったり、伝説っぽいことにテンションを上げたりしてもよさそうなものだが、最近の俺の悩みはもつと身近で切実だ。目の前の光景が、どう見てもシュールすぎるのである。

カクカクハウスの周囲では、五メートル級のポメラニアンやチワワやパグやらが『安全第一』と書かれた黄色いヘルメットを頭に載せ、木材や石材を運び回っていた。

中には資材を肩に担いで、器用に二足歩行しているやつまでいる。どう見ても、巨大犬の建築現場。しかも、そのどれもが妙に手際がいい。

トンテンカン、トンテンカン、と小気味よい音が響くたび、建物らしきものが少しずつ形になっていく。

なお、こいつらはただの巨大犬ではない。全員、伝説級の魔獣、フェンリルである。

少し前にフェンリルに関する騒動があつて、それが終わってみんなでここに移住してきたのだ。

「フェンリルのみんなのおかげで、大分進んだねえ。フォルティア荒野の開拓！」

弾んだ声と共に、隣にやってきたのはブリジットちゃんだった。

金髪のポニーテールを揺らしながら、彼女は目の前の光景を本当に嬉しそうに眺めている。

ブリジット・ノエリア。

公爵家の令嬢でありながら、【毒無効】なんていう地味すぎるスキルを授かったせいで、この

フォルティア荒野の開拓任務を押しつけられた、いわゆる追放令嬢だ。

でも本人は、そんな境遇を感じさせないくらい前向きで、頑張り屋で、領主としても驚くほど真

面目にやっている。

「ブリジットちゃん、お疲れ様。事務仕事、いち段落したの？」

「うん！ エルディナ本国に提出しなきゃいけない書類がけっこうたくさんあつて、ちよつと手間取っちゃった」

そう言つて笑うブリジットちゃんに、通りすがりのフェンリルたちが前足をひよいひよい振つてくる。

俺とブリジットちゃんも、笑つて手を振り返した。

このあたりの光景だけ切り取ると、平和そのものだ。いや、平和なんだけど、やっぱり絵面はだいぶおかしい。

巨大犬たちがトンカン大工仕事をしている光景を見ながら、俺はブリジットちゃんに聞いた。

「でも、本当に俺が手伝わなくてよかったの？ ほら、カクカクハウスを建てたときみたいに、俺の『大地タイム』を使えば、もつと簡単に建物も建てられると思うんだけど」

ちなみに『大地タイム』というのは、俺が苦し紛れについた嘘だ。

最初にブリジットちゃんと会ったとき、うっかり自分をティマーだと言ってしまったせいで、土魔法で家を建てたことまで「大地をタイムしました！」みたいな無茶な理屈で押し通している。

「ありがとう、アルドくん。そう言ってくれるのは、すつごく嬉しいよ。でもね」

ブリジットちゃんはそう言つて、作業中のフェンリルたちへ目を向けた。

「この地を……フォルティア荒野を開拓していくなら、誰か一人に任せっきりじゃなくて、この地に住むみんなが頑張つて町を作り上げていく……そういう姿が自然なんじゃないかな、つて、あたし思ったの」

さすがはブリジットちゃん。もう完全に、領主としての自覚を持っている。

五メートル級の犬たちが安全ヘルメットを被つて大工仕事をしているこの状況を自然と呼んでいいのかは、この際さておくとして、言つておくことはすごく真つ当だ。

「そっか。うん、でも確かに、自分たちが住む所を自分たちで作っていくのって大事だよ。でも、本当に困ったら言ってね。いつでも手を貸すからさ」

「うん！ 頼りにしてるよ、アルドくん！」

ブリジットちゃんが笑う。その笑顔を見ると、こっちまでちょっと元気になるから不思議だ。「いたいた」。な～にやってんすか、兄さん、姉さん！」

明るい声が後ろから飛んできた。

振り向くと、褐色の肌に金茶の髪を揺らした少女がこちらへ歩いてくる。

黒マスクをした彼女は、リユナちゃんだ。

その正体は、咆哮竜ザグリユナ。元々このフォルティア荒野の主として恐れられていた伝説の魔竜なんだけど、今はこうして人の姿を取り、俺たちと一緒に暮らしている。

本人はギャルっぽい軽いノリなのに、正体だけ聞くと重すぎる。

「お～お～、フェンリルたち、がんばってるじゃないすか～！ もう結構、形になってきてる建物もあるじゃないすか～。やるう～」

リユナちゃんが呑気にそんなことを言うと、その後ろからチャッチャッチャッと軽快な足音が近づいてきた。

やってきたのは、もふもふのミニチュアダックス風フェンリル——フレキくんだ。

フェンリルの秘宝に認められ、名実ともにフェンリル族の王となった彼は、新たに身につけた

【縮小】スキルがよほどお気に入りらしい。

本来は五メートルくらいの大きさなのだが、最近はいたい小型犬サイズでよろしている。

「そうでしょうでしょう！ こう見えて、ボクたちフェンリル族はすぐ器用な種族なんですよー！」

「本当だねえ、フレキくん！ みんな、大工仕事もすっごく上手でびっくりしちゃったよ！」

「大昔、フェンリルの里を訪れた旅人が、ボクたちに様々な技術を授けてくれたのが始まりだと言われています。ボクが生まれる遙か昔の話なので、定かではないんですけど」

なるほど。巨大犬用ヘルメットとか巨大犬用ガスマスクとか、どう考えてもフェンリル専用とは思えない妙に技術力の高い道具が揃ってるなと思ってたけど、そういう事情があったのか。

俺は一人で納得しつつ、少しだけ別のことも考えていた。

フェンリルたちが建てている家々、どう見ても犬小屋っぽいんだよね。

いや、作ってる本人たちが巨大犬なんだから、自分たちが住みやすいデザインになるのは当然なのかもしれない。

でも、カクカクハウスの周囲に、巨大な犬小屋風建築がずらっと並ぶ町……これ、訪れた旅人はかなり困惑しない？

もう少しこう、街並み全体に統一感とか、シティデザイン的な何かが欲しい気もする。

まあ、俺にそんな知識はないんだけど。



こういうのに詳しい住民とか、いつか加わってくれと助かるんだけどなあ。

「ブリジット様ー！ リユナ様ー！ アルド坊ちゃんー！ 兄上ー！」

作業中のフェンリルたちの奥から、一匹のバグ型フェンリルがスタタタッと走ってきた。五メートル級のバグ。迫力はあるのに、どうしても愛嬌が勝つ。

彼の名はゲエルくん。こう見えてフレキくんの弟である。

明らかに犬種が違っただけど、そこは異世界だ。そもそも犬種なんて概念があるのかも怪しい。細かく考えたら負けな気がする。

「ゲエルくん、どうしたの？ そんなに慌てて」

「それがですね……実は……こんなものが届いていまして……！」

ゲエルくんはそう言って、自分の胸毛の中をゴソゴソと探り始めた。

そして器用に、新聞と書簡しよかんを取り出す。

フェンリル族って胸毛に荷物しまっ文化あるの？ 便利そうではあるけど。

「なにになに？」

俺はとりあえず新聞に手を伸ばした。

ブリジットちゃんとリユナちゃん、フレキくんも横から顔を寄せてくる。

一面には、でかでかと思出しが踊っていた。

『フォルティア荒野から、『咆哮竜ザグリユナ』の魔力反応が消失!? エルディナ王国、魔導帝国

ベルゼリア、北方王国ラインハルトなど近隣諸国に激震走る！』

「こ、これって……!？」

ブリジットちゃんが目を丸くし、フレキくんもリユナちゃんの方を見る。

「おっ、これ、あーしのことじゃないっすか」

当の本人は妙に呑気^{のんき}だった。

俺は新聞とリユナちゃんの顔を見比べた。

「え、ええ……なんか、めちゃくちゃ大ごとになってる……これって、リユナちゃんが人間に変身して魔力反応が小さくなったから、ってことだよな？ リユナちゃんって、ひよつとしてめっちゃ有名人……というか、有名童だった感じなの？」

するとリユナちゃんは、ちよつとだけバツの悪そうな顔になる。

「あー……まあ、そつすね……有名つつーか、悪名つつーか……」

歯切れが悪い。なんかあんまり掘られたくなさそうだ。

俺は一瞬だけ迷ったあと、それ以上は聞かないことにした。

リユナちゃんはリユナちゃんだしね。

「そっか。でもこれ、リユナちゃんがもう一回童の姿に戻れば、魔力反応も戻って騒ぎも収まるんじゃないの？」

「いやでも、魔力反応が出たり消えたりしてる方が余計目立ってマズくないっすか？」

それはそうかもしれない。それに新聞を見る限り、今すぐにどうにかなるわけでもなさそうだ。

「まあ、リユナちゃんは今のリユナちゃんのままでいてくれたらいいよ。何かあったら、俺もブリジットちゃんもついてるしさ！」

「うん！ だってリユナちゃんは今もう、あたしたちの家族だもん！」

「ボクたちも同じ気持ちですよ！」

フレキくんがハッハッハッと息を弾ませながら尻尾を振る。

リユナちゃんはきよとんと目を丸くしたが、すぐに八重歯を見せて笑った。

「っすね！ みんなのこと、頼りにしてるっすよ！」

その笑顔を見て、少しだけ空気が和らぐ。

……でも、ゲルくんが持ってきたのは新聞だけじゃなかった。

ブリジットちゃんは、もう一通の書簡を受け取った。

上質な紙。王都の紋章が押された封蝋^{ふうろう}。見るからに、ただの手紙ではない。

ブリジットちゃんの表情が陰しくなる。

封蝋を解いて文面に目を通した次の瞬間、その顔はさらに強張^{こわば}った。

さっきまで柔らかく笑っていた彼女の表情が目に見えて変わり、胸の奥に嫌な予感が落ちた。

「……ブリジットちゃん？」

俺が声をかけると、彼女は手紙から顔を上げた。

けれど、その瞳にはもう、いつもの穏やかな光だけではない何かが宿っていた。

◇ ◇ ◇

「ふむふむ……つまり、領地管理に関わる書類提出ってことか」

俺はカクカクハウスのダイニングテーブルに肘をつき、ブリジットちゃんから受け取った書簡に目を通していた。

文面はやら丁寧だが、内容は実に堅苦しい。エルディナ王国の中央登録所まで来て、行政資格の追加認可と管理権限の更新を受けろ、ということらしい。

うん。分かりやすく言えば、王都の役所まで一回来いって話だ。

「ごめんね、アルドくん……あたしが代表って形になってるから、どうしても行かなきゃいけない……」

ブリジットちゃんが申し訳なさそうに肩をすぼめる。

「気にしないでいいよ。ブリジットちゃんが頑張ってくれてるおかげで、この領地はちゃんと回ってるんだから」

実際、フェンリルたちを領民として迎え入れてから、フォルティア荒野の開拓は驚くほど順調だった。外では今も、巨大なフェンリルたちが手際よく整地を進めている。

「それに、ちょうどいい機会かも。俺、まだこの国の都市部って見たことないし」

これは本音だった。

フォルティア荒野に降りてきてから、俺の生活圏は森と草原ばかりだ。ちゃんとした人のいる街並みを、この目で見たことがない。

先日 of ベルザリオンくんと的一件でも思い知ったが、俺はこの世界の常識を知らなさすぎる。

真祖竜の力で大抵のことはどうにかなくなってしまおうとはいえ、ここまで無知だと、そのうち盛大にやらかしそうで普通に怖い。

それに、この世界の文明はどこまで進んでいるのか、インフラはどうなっているのか、技術レベルは、料理の幅は、そんな未知への好奇心がむくむくと湧いてくる。

「じゃあ……ついてきてくれるの？」

「もちろん。ブリジットちゃん一人じゃ心配だし」

「うう……ありがとう、アルドくん……!」

ぱつと明るくなったその顔を見ると、自然とこっちまで和んでしまう。

「それなら、お供にボクのことも連れて行ってください!」

元気な声がテーブルの下から上がった。

そこには、ミニチュアダックスサイズのフレキくん。金色の首輪を光らせながら、ぴよこぴよこと足を揃えて跳ねている。

「ボクも人間の文化を勉強したいんです！ブリジットさんと一緒に、皆が仲良く暮らせる領地を作るためにも！」

確かに、フレキくんなら【縮小】スキルを使えば、ただの小型犬にしか見えない。街へ連れて行くのも難しくないだろう。

「うん、心強いよ……さて、あとは」

自然と、視線がリュナちゃんへ向いた。

黒マスクの少女は、椅子に深く腰掛けたまま、こちらをじっと見ていた。

でも、何も言わない。その無言が、なんだか妙に気になった。

「リュナちゃんは、どうする？一緒に行かない？」

俺がそう聞くと、彼女は少し間を置いて首を横に振った。

「んー、今回は留守番でいいです。あーし、街はけっこう慣れてるし。今回はどうせブリジット姉さんの用事だし、兄さんとフレキっちがいれば、それ以上の護衛はいらないっしょ？」

「……そう？」

ちよつと意外だった。てつきり喜んでついてくると思っていたのに。

「それに……街って人多いし、魔力の流れもせわしくて苦手なんすよ。こっちの方が落ち着くすね」

言葉はいつもの軽い調子だった。でも、いつもより少しだけ遠い感じがした。

◇ ◇ ◇

「じゃ、そういうことで。あーしはのんびりお留守番してるっすね」
そう言っつて、リュナちゃんは背を向けて自分の部屋へ歩いていく。
軽い足取りに見えて、その背中にはほんの少しだけ迷いの影が揺れていたような気がした。

数日後。朝のカクカクハウスは、いつもより少しだけ静かだった。

柔らかな陽光が差し込み、木の床に残る温もりが、この家の穏やかさを物語っていた。

玄関げんかんの扉の前で、俺は深呼吸をひとつする。

荷造りは昨日のうちに済ませてある。肩には小さなリュック。中には最小限の携帯食と、リュナちゃんが描いてくれた手描きの地図を入れていた。

隣には、しっかり装備を整えたブリジットちゃん。丈夫な革製かわせいバックパックには必要な物資がきっちり詰め込まれていて、こういうときの段取りの良さにはいつも感心させられる。

「兄さん、ちゃんと地図持ったっすか？」

顔を上げると、玄関の柱に片手を添えたリュナちゃんが、俺の腰袋を顎あごで示していた。

いつもの軽口混じりの調子。だけど、ほんの少しだけ声が低かった気がする。

「うん、バッチリ。リュナちゃんが描いてくれたやつ、めっちゃ丁寧だったよ。あれがあれば迷子

になんてならないさ」

「ふふん、当然つすよ。方向音痴^{ほうこうおんち}の兄さんのこと、見越して描いたつすからね」

そう言つて、リュナちゃんは笑つた。

でも、その笑顔はどこか張り付いたもののように見えた。

そのまま目が合う。ほんの数秒。だけど、その視線はすぐに逸^そらされた。

……そういえば、さつきから彼女はずっと玄関^{しきい}の敷居^{しきい}から一步も出ていない。

いつもなら「あーしも行くつすよー！」と真つ先に飛び出してくる子なのに。

今日は、違つた。

「……姉さん、ほんとに無理しないように。今の時期の街、けっこう騒がしいつすから」

リュナちゃんは、ブリジットちゃんにそう言つた。

口調は穏やかなまま。でも、その目線はほんの少しだけ遠くを見ていた。

「うん、大丈夫。アルドくんが一緒だし、ね？」

ブリジットちゃんは明るく答える。

けれど彼女も、何かに気づいているのかもしれない。視線が一瞬だけ、リュナちゃんの手元へ泳いでいた。

俺の胸に、小さなざらつきが残る。

言葉にはできない。でも確かに、何かが引つかかつていた。

どうしたんだろう、リュナちゃん。でも、今は聞けなかった。

それが彼女の「選んだ距離」なのだと、なんとなく分かつてしまったから。

「それじゃ、行ってくるよ。リュナちゃんも、無理しないでね」

「うん。気をつけてつすよ、兄さん。ブリジット姉さんも、フレキっちも」

リュナちゃんは柔らかに笑つた。

それは、黒マスクの下に隠れていた頃と変わらない、どこかあたたかい笑顔だつた。

……でもやつぱり、ほんの少しだけ遠く感じた。

「いつてきまーす！」

俺の肩に乗つたフレキくんが、前足をびよと振つて元気に挨拶する。

その声に、玄関先の空気がわずかに和らいだ気がした。

そして俺たちは、フォルティア荒野をあとにした。

視界の端に、リュナちゃんの見送り姿が小さく残っている。

手は振ってくれていた。けれど、その笑みはどこか少しだけ寂しげだつた。

——何か、言いたいことがあつたんじゃないか。

そう思いながらも、俺はその背中に声をかけることができなかった。

草木の香りを含んだ爽やかな風が吹く。

旅の始まりの気配と、どこかに置いてきてしまったものの余韻を背負いながら。

俺たちは荒野を歩き出した。

第二章 迫る大罪、現れる異世界都市

カクカクハウスのリビングには、いつも通りによく風が通っていた。けれど今日は、どこか少し違っていた。

直角ばかりで組まれた妙な形のソファ。その一角に、リユナはぐでんと寝転がっていた。

半ばマットレスみたいになったクッションに顔を埋め、窓から差し込む太陽の光に片目を細める。
「んあゝ……ギャギャツ！ って、耳に障るっすね……」

窓の外から聞こえてくるのは、荒野の魔鳥たちのけたたましい鳴き声だ。まるで喧嘩けんかでもしているみたいに騒がしい。そのくせ、家の中は妙に静かだった。

「……静かつすね」

ぼつりと落ちた声は、誰にも届かないまま消えた。

右手ではネイルヤスリをくるくる回し、左手の爪を磨みがいている。

黒マスクはいつもより早く外され、ソファの肘掛けに引っ掛けられていた。マスクがないと、空気が肌に触れすぎて落ち着かない。

けれど今日は、どうにも着ける気になれなかった。

そのときだった。

——カッン、カッン。

廊下から響く軽い足音が、木の床を優しく叩いた。

やってきたのは、ネクタイ付きの前掛けをきっちり着けた巨大バグ顔のフェンリル、ゲエルだった。律儀に直立し、前足だけで銀のお盆を器用に抱えている。

「リユナ様。お茶をお持ちしました」

「おお、気が利くじゃん、ゲエル」

リユナは気怠けだるげに手を上げ、黒マスクを着け直しながら身体を起こした。寝癖のついた髪がふわりと肩に落ちる。

ゲエルは静かに歩み寄り、お盆をサイドテーブルに置いた。湯気の立つハーブティーと、ほんのり甘い香りのするクッキー。

「本当に……お留守番でよかったのですか？」

ゲエルの声は控えめだった。胸の内に踏み込みたいが、踏み込みきれない。そんな響きがあった。リユナは答えず、カップをひよいと受け取ってひと口啜する。ふう、と小さく息を吐き、視線を逸らしたままネイル磨きを再開した。

「いーんだよ。あーしはこっちでのんびりしてた方が性に合ってるの」

いつも通りの軽い口調。けれど、ほんの一拍だけ間が空いた。

グエルは黙って頷いた。だが、なおも何かを言おうとして前足をそっと上げかける。

「……ですが、リユナ様は、アルド坊ちゃんのことを——」

——バフンッ！

ソファの上から繰り出された飛び膝蹴りが、サイドテーブルを飛び越え、寸分変わらずグエルの顔面に炸裂した。

「余計なお世話だっつの！ ブタ犬が！」

鈍い音とともに、グエルは錐揉み状に宙を舞う。

脚をぴんと伸ばして、窓から外へと飛び出していく。

「ありがとうございますっ！」

なぜか、感謝の言葉だけを残して。

リユナはふうっと息をつき、再びソファに身を預けた。

カップの中のハーブティーはまだ温かいのに、胸の奥だけが妙に冷えている。

視線の先には、昨日までブリジットが整理していた報告書の書き損じが残っていた。

役所仕事は面倒だ。どこの国でも融通が利かない。

でも、それだけじゃない。ブリジットは分かっていた。

咆哮竜ザグリユナが、この荒野でどれほど危険な存在として扱われてきたかを。

そのザグリユナが今、人間の姿でこの家において、のほほんと茶を啜っているなんて、王都にまともにも報告できるわけがない。

もし知られれば、危険指定個体として処理対象になるのは間違いない。

いや、それだけじゃ済まないだろう。

そんなものと暮らしているというだけで、ブリジットもアルドも王国に睨まれる。

だからブリジットは、ごまかした。リユナの存在を、報告書の上から丁寧に削り落として。

「……あーしのせいっすよね、結局」

自嘲気味に呟き、クッキーをひとつ口へ放る。甘い。けれど今日は、味がよく分からなかった。

ブリジットは優しすぎる。

命を奪いかけた相手のことを、今では家族みたいに扱ってくれている。

それが痛いほど伝わるからこそ、苦しくなる。

ブリジットは人に受け入れられる側だ。真っ直ぐで、明るくて、誰からも疑われない。

それに比べて自分は、黒マスク越しに距離を測ってばかりいる。

ぎゅっと拳を握ると、割れたクッキーの欠片が掌に刺さった。

窓辺の机の上には、黄色いリボンの付いた小さな箱が置かれている。

渡す機会を失ったままの、贈り物だった。

「……………ま、いーんすよ。あたしは、こっちで見守ってるっすから」

小さく笑う。その笑みは、自分でも分かるくらい寂しかった。

ふいに、窓の外で風が鳴った。リユナは立ち上がり、窓辺へ歩み寄る。

そこから見えるのは、いつもと変わらないフォルティア荒野の景色。

それなのに今日は、どこか違って見えた。

「……行っちゃったつすね」

ぽつりと漏れた声は、みんなが旅立っていった方角へと溶けていく。

たった数ヶ月。

でも、その数ヶ月は彼女がこれまで過ごしてきた千年の孤独を忘れさせるには十分すぎるほど、

眩しかった。

遠くの雲が流れていく。

その先にあるのが王都であり、ブリジットの未来であり、アルドが歩いていく世界だ。

そこに自分の居場所があるのかどうかは、まだ分からない。

——ズガアアン！

突然、荒野の彼方から雷鳴じみた爆音が轟いた。

ティーカップが小さく揺れ、熱い雫が膝に落ちる。

だが、リユナは動かなかった。今のは自然の雷じゃない。フェンリルたちによるものだ。

「……なにか、来たつすね」

低く呟いた声には、もういつもの軽さがない。

ソファから立ち上がり、マスクに手を伸ばす。

その瞬間、再び衝撃音が窓を震わせた。

ズガアアン！

耳をつんざく爆音。

その中に混じって、かすかに聞こえるのはフェンリルたちの吠え声——いや、悲鳴だ。

「グエルっ!」

弾かれたように玄関へ駆け寄り、マスクを引き上げながらドアを開け放つ。

地面には、グエルを筆頭に数十体のフェンリルたちが倒れていた。

「……え？」

誰も動かない。全員、まるで眠っているみたいだった。

しかもただの眠りじゃない。陶然とした表情。薄く浮かぶ笑み。うっとり揺れる尻尾。

「……こいつら、なんの夢見てるんすか……!」

工事用ヘルメットを被った大型フェンリルたちが、爆音の直後だというのに、幸せそうな顔で横たわっている。異常事態にもほどがあった。

ギシ、と地面を踏む音がする。

振り向くと、白銀の巨軀を持つフェンリル族の元族長、マナガラムが、荒野の中心に立つ異様な

男と睨み合っていた。

黒髪に赤メッシュ。サングラス。袖を通さずコートを羽織った、軽薄そうな男。けれど、その立ち姿だけが妙に目を引く。

——気配が見えない。魔力も、殺気も、何も感じない。

なのに、ここにいる全員を圧倒している。

「リユナ殿！ 侵入者です！」

「侵入者、って……！」

「我が百の牙、そして我が子グエルまでも……！ 全て、手も足も出ず……！」

リユナの目つきが一気に陰しくなる。

風が鳴る。

倒れ伏したフェンリルたちの影が、長く荒野に伸びていた。

「貴様、何者だ……!？」

マナガルムの問いに、男は薄く笑った。

「俺？ 名乗る程の者じゃあないよ」

そう言っ、左手の魔本をひらりとめくる。次の瞬間——

バチバチッ！

空気が焦げるような音とともに、マナガルムの背後に雷が奔った。

『天穿・雷砲』！

マナガルムが咆哮とともに大地を蹴る。空より降る極雷が、まっすぐ男へ叩きつけられる。だが——

「狼クン。あんた、どんな狼がタイプだい？」

男が指を鳴らした。魔本の一節が金色に光る。

『幻愛変相』

雷は、ぐにやりと形を変えた。

魂を得たみたいに空中で螺旋を描き、やがて二頭のフェンリルの姿をとる。

優しく美しい毛並み。琥珀色の瞳。

「な……っ……!？」

マナガルムの巨体が震えた。

「……アレクサ……？」

かつて失った最愛の妻。その名が、震える声で零れ落ちる。

「まさか……そんな……いや、これは、幻か……？」

心が揺らいだ隙を、男は見逃さなかった。

ふわりとコートが舞い、男の指先がマナガルムの額へ伸びる。

「悪いな、狼クン。ちよいと席を外してもらおうか」

人差し指と中指が、そっと触れる。

『ドリームエンブレイス夢想抱擁』

その瞬間、マナガルの瞳から涙が零れた。

ふっと全身から力が抜け、巨体がある場に崩れ落ちる。

穏やかな寝息とともに、夢の中へ沈んでいった。

「……!? マナガルム……!」

リュナが駆け寄ろうとしたそのとき、男がゆっくりとこちらを向いた。

サン格拉斯の奥の視線が、黒マスクの上で止まる。

そして、ニヤリと笑った。

「……っ」

その笑みに、リュナの動きがほんの一瞬だけ止まる。

男は魔本を閉じ、右手でサン格拉斯を外した。

「——あんたは……っ!」

驚愕と困惑が、一気に胸を駆け巡る。

咆哮竜ザグリユナと色欲の魔王ヴァレン・グランツ。

二つの伝説が、ついに向かい合う。

——このとき、まだリュナは知らなかった。

この異変こそが、やがてアルドたちを巻き込む“運命の花火”の始まりだったことを。

◆ ◆ ◆

フォルティア荒野の最果て、風にさらされた岩肌の丘の上で、俺——アルドたちはしばし立ち止まっていた。

……といつても、たぶん名残惜しさを引きずっていたのは俺だけだ。

隣のブリジットちゃんは今度の一步を踏み出しているし、フレキくんに至っては足元で尻尾ぶるぶん振っている。

だって真祖竜の住み家、悠天環ゆうてんかんを降りてからずっとフォルティア荒野から出なかったんだから。俺にとっては、あそこがもう第二の故郷みたいなものなのだ。

「このまま徒歩で進むの？ 王国の街道まで、まだ結構距離あるんじゃない？」

そう尋ねると、足元のフレキくんが誇らしげに胸を張った。

ミニチュアダックスフンドって構造上、胸を張ってもあんまり変わらないんだけどね。

「安心してください！ アルドさん、ブリジットさん！ ここから先はボクにお任せを！」

「え？ 任せるって、何を——」

次の瞬間、風が唸った。

小さなフレキくんの体が、みるみるうちに膨れ上がっていく。耳も足も胴体もそのままのバランスで、ただひたすらスケールアップしていくように。

そうして完成したのは、五メートル級の巨大ダックスフンドだった。

「お、おほ……久々に見ると、やっぱデカいね。フレキくんのノーマルフォーム……」

最近はずっと【縮小】スキルでミニチュアダックスフンド化していたせいか、久しぶりに見ると破壊力がすごい。

「ふふっ……大っきいフレキくんも、あたし好きだよ！」

ブリジットちゃんはあまり驚いた様子もなく、柔らかに微笑んでいた。

「さあ、どうぞ！ 背中に乗ってくださいっ！ 今のボクは、フェンリルの秘宝でパワーが上がってるのが自分でも分かるんです！ 以前みたいに、へばったりなんかしませんよ！」

自信満々のフレキくんに、ブリジットちゃんがぼつと顔を明るくする。

「すごいよ、フレキくん！ それじゃ、お願いしちゃおうかな！」

そうして俺たちは、フレキくんの背にまたがった。

ふかふかの毛並み。やたら安定感のある胴体。見た目は遊園地の百円で動く乗り物みたいなのに、乗り心地は妙に上質だ。

「しゅっぱーっ！」

「え、ちょ、まっ——」

次の瞬間、視界がぐにやりと歪んだ。

世界が後ろへ吹き飛んでいく。景色は線のように伸び、風音が容赦なく耳を切り裂いた。

俺たちは文字通りの爆速で荒野を駆け抜けていた。

「これ、もはや走ってるんじゃないやなくて飛んでない!? フレキくん!? 安全運転でいこう!？」

「アルドくん、後ろに倒れないように気をつけて！」

ブリジットちゃんの声が風に乗って届く。

だが身体を傾ける余裕すらない。空気抵抗で張りついている。

気分はオープンカー式の新幹線だ。これは怖い！

「……まさか、ミニチュアダックスフンドが最速移動手段になるとはね……」

そんな俺のぼやきも、数分のうちに消えた。冗談抜きで、ほんの数分だった。

視界の先に舗装された街道と立て看板が見えてくる。

そこには、こう記されていた。

『ようこそ、エルディナ王国領へ』

「……いや、すごかった……俺の生え際、ちゃんと残ってる……?」

「大丈夫ですよ！ アルドさん！」

フレキくんがくると一回転して再びミニチュアサイズに戻ると、俺たちは舗装された街道へ足を踏み入れた。

そして俺は、思わず周囲を見回した。

……なんか、想像してた異世界と違うぞ？

石畳の街道は驚くほど整っていた。

ヨーロッパの観光地の田舎道みたいに美しく、しかも不自然なくらい管理が行き届いている。

その道端に、金属とも石ともつかない不思議な質感の柱が立っていた。表面には淡い光が走り、どこか近未来的ですらある。

「あれ……なんだ？」

「あれは《転送魔導柱^{ガイド・ピラー}》だよ！」

「が……《転送魔導柱^{ガイド・ピラー}》……!?」

耳慣れない単語を聞き返した、その直後だった。

柱が、音を発した。

『警告…魔物反応、距離三百メートル。討伐部隊転送準備開始』

「えええええ!? 今のって音声案内!? しかも転送って……」

俺が口を開けていると、数十メートル先の街道上に円形の魔法陣が現れた。

その中心から、光に包まれた五人組の冒険者が出現する。

「魔物発見。迎撃開始します！」

「危険なので、一般の方は街道から出ないようお願いしまーす！」

彼らは流れるような動きで武器を構え、そのまま草むらへ駆け込んでいった。

なんだこの手慣れた感じ。もはや冒険者というより、異世界版の警備部隊である。

もって『ひいっ魔物だあ！』みたいに、みんな魔物に怯えている世界観かと思っただ。

「あれは国家冒険者^{こくぽうしや}の人たちだね！ いつもご苦勞様です！」

ブリジットちゃんが隣でぺこりと頭を下げる。

「……国家、冒険者？」

「うん！ 国が直接雇い上げた冒険者たちのことだよ！ アルドくんの地元にはいなかったかな？」

「うーん……た、たぶん、いなかったんじゃないかなあ……」

そもそも人間自体いなかったからね。

悠天環には。

「街道の整備は進んでるけど、まだまだ魔物の襲撃もあるからね。そういうときは、国家冒険者の皆さんが追いかけてくれるんだよ！」

「へえ……そんな仕組みになってるのか」

現代日本でいう公務員とか警備組織みたいな役割を、国直属の冒険者が担っている感じが、思っていた異世界とは違う。

けれど——だからこそ、めっちゃワクワクする！

そう思いながら、俺は街道の先へ視線を向けた。

この先には、まだまだ未知の異世界が待っている。
そんな予感がして、胸が高鳴った。

◇ ◇ ◇

鳥の声と、遠くの水音。そんな穏やかな時間の中、俺たちは街道を並んで歩いていた。
俺とブリジットちゃん、それから足元をちょこちょこ歩くミニチュアサイズのフレキくん。
ふと横を見ると、ブリジットちゃんはどこか懐かしそうな顔で景色を眺めていた。

「ねえ、ブリジットちゃん……そういえば、実家ってこの国なんだよね？」

「ん？ うん、そうだよ！」

いつもの明るい返事。でも、笑顔にはほんの少しだけ力が入っているように見えた。

「王都に近いの？ それとも、もうちょつと離れてるのかな？」

「あー……ううん、けっこう遠いかな。ノエリア家の本邸^{ほんぐ}って、王都ルセリアから見ると南東の方
にあつてね。歩いたら何日もかかっちゃうよ」

「へえ……そんなに遠いんだ」

そう返すと、ブリジットちゃんは少しだけ表情を緩めた。

「うん。だから今回は寄らなくていいかって思ってるの……あたしが急に帰ったら、びっくりさ

せちゃうだろうし」

その笑顔は明るくて優しいのに、ほんの少しだけ寂しさの匂いがした。

そうだ。彼女はスキル【毒無効】を授かった、なんて理由で、半ば厄介払いみたいにフォルティ
ア荒野へ送り出されたんだった。

どれだけ明るく振る舞っていても、その記憶はきつと痛みとして残っている。

「……そう、なんだ。ごめん、なんか余計なこと聞いてちゃったかも」

「えへへ、大丈夫だよ？ アルドくんが聞いてくれて、なんか嬉しかったから！」

そう言つて、ブリジットちゃんはにこつと笑った。

その笑顔に、少し救われた気がした。

「でもさ、ブリジットちゃん」

「ん？」

「家族がいるって、それだけでちよつと羨ましいな」

思わず本音が零^{こぼ}れていた。だって、俺にはこの世界のどこにも帰る家なんてないから。

悠天環は生まれた場所ではあるけど、あそこにいる真祖竜たちは家族という感じじゃない。

真祖竜の中で懐かしさを感じる相手がいるとすれば、少しの間会話を交わしたグルーシャくらい
のものだ。

「……っ」

一瞬、ブリジットちゃんの目が見開かれた。
そして次の瞬間、彼女は小さく俺の手を握る。

「じゃあさ、アルドくんの居場所、これからはあたしが一緒に作っていくよ！」

その台詞に、俺は一瞬返す言葉を失った。でも、すぐに笑って頷く。

「うん。頼りにしてるよ、ブリジットちゃん」

陽が少し傾き始めた頃、遠くの地平線の先に“それ”が見えてきた。

「おっ……見えてきたね、ルセリア！」

「うんっ！ あれがエルディナ王国の中心——王都ルセリアだよ！」

ブリジットちゃんが指差した先に広がっていたのは、俺の想像とはまるで違う王都だった。

もっとう、円形の巨大城壁に囲まれた城塞都市みたいなのを勝手に想像していたのだ。異世界アニメのオープニングにドーンと出てくるようなやつを。

けれど実際にそこにあつたのは、田舎道からそのまま街へと滑らかにつながる、巨大で整然とした都市だった。

境界は曖昧なのに、妙に美しい。

石畳の街道はそのまま街の中心へ伸び、両脇には清潔感のある住宅街が広がっている。

花壇、噴水、魔導式の照明灯。建物もまた不思議だった。

ファンタジー建築と近代建築を混ぜ合わせたような、見たことのない意匠で統一されている。

「おお！なんだこの街、綺麗すぎない!？」

「えへへ、ルセリアはね、最新の建築技術と魔法のハイブリッド都市なの！整備も景観もぜんぶ、王立都市工房の人たちががんばってくれてるんだよ！」

確かに、その説明だけの説得力がある街並みだった。

「やばい、俺、この街、超ワクワクする……!!」

「でしょ!? アルドくんにも気に入ってもらえると思ってたんだ〜!」

そうして俺たちは、王都ルセリアへと足を踏み入れた。

異世界の中心地。なのにどこか懐かしく、そしてどこより新しい場所。

俺の冒険は、ここから始まるんだ。

第三章 王都ルセリア

ルセリアの街に足を踏み入れた途端、空気が一変した。

道の両脇には、色とりどりの布で飾られた屋台がずらりと並び、甘く香ばしい匂いが風に乗って漂ってくる。

遠くでは木笛や太鼓が鳴り、人々の笑い声や子どもたちのはしゃぐ声があちこちに弾んでいた。

「わ、わ……なんかすごいぞこれ!? 本格的にお祭りしてるじゃん!」

「うん、うん! ちょうど今、^{セレスタリア}夏祝祭^{サマニタリヤ}の時期なんだよ! 街中が浮かれてて、こういう雰囲気なんだ〜!」

「夏祝祭……? この国の祭りみたいなものかな?」

「うん! 国を挙げての大きなお祭りで、国外からのお客さんも大勢いるんだよ!」
ブリジットちゃんがぼつと笑う。

さっきまでの柔らかな微笑みとは違う、子どもみたいに目を輝かせた笑顔だった。

その隣で、フレキくんもミニチュア姿のまま屋台を見上げ、尻尾をぶんぶん振っている。

「この香り……お団子ですか!? 焼きトウモロコシ!? なんですかこれは! パラダイスじゃないですかっ!」

「ちょ、フレキくん、落ち着いて!」

俺が慌てて止めても、フレキくんはハッハッハッと息を弾ませながら視線をきよろきよろ、尻尾で地面をばしばし叩いていた。

ダックスフンド型フェンリルの食欲、恐るべし。

そんな賑やかさの中、ふとブリジットちゃんが呟く。

「この時期になるとね……いつも家族で街に出て、お祭りを見に来てたの。お父様とお母様と、それから……」

そこまで言って、彼女は言葉を飲み込むように笑った。

でも、その笑顔にはほんの少しだけ色がなかった。

「久しぶりに見るなあ、この光景。あたし、やつぱりルセリアのこの空気、好きなんだよね。明るくて、元気で、人がたくさんいて……全部、ちゃんと生きてるって感じがする」

「……うん。なんか分かるよ」

俺は静かに頷いた。

その声が、ただ懐かしいだけじゃなく、置いてきた過去にそつと触れるみたいに聞こえたからだ。
「……ちよつとだけ、歩いてもいいかな?」

「もちろん。一緒に行こう」

そう言うと、ブリジットちゃんは「ありがとう!」と笑って、俺の腕を軽く引いた。

屋台の灯りが、彼女の横顔を柔らかく照らす。

その笑顔は、どこか寂しげで——でも、とても優しかった。

賑やかな通りを抜けると、少しだけ静かな通りに出た。

人通りは減ったけれど、そこにも数軒の店がぼつぼつと並んでいる。その中で、年季の入った木造の小さな本屋がふと目に留まった。

「……うわ、レトロな本屋さんだ」

入口には風鈴が吊るされていて、風が吹くたびにちりと鳴る。扉のガラスには営業中と手描き

の札が下がっていた。

神保町の古本屋を、ファンタジー風に改装したような店だ。

「ねえ、ちょっと寄っていいかな？」

「もちろん！ アルドくん、こういうお店好きそうだよねー！」

俺は軽く手を上げて答え、扉を押し開けた。カラン、と小さな鈴が鳴る。

店の中は、木の香りと紙の匂いが混ざった、どこか懐かしい空間だった。

棚には本がぎっしりと並び、分厚い魔法書や歴史書、地図集、冒険譚ぼうけんたが整然と収まっている。

まさに異世界書店。これは……テンション上がるやつだ！

ぐるりと見渡したあと、俺は自然と端の棚へ向かっていた。

どこの世界でも、隅っこの棚にはちよつと変わった本がある。

案の定、そこには売れ残りっぽい本や、背表紙の焼けた雑誌が押し込まれていて、その中に、妙に目を引く本のシリーズが二十冊ほど並んでいた。

「……え？」

手が止まる。

表紙には、ファンタジー風の服を着た可愛い女の子たちが笑っていた。背景にはハートマーク。タイトルの文字も、どう見ても日本のラブコメ漫画っぽい。

しかも、そこにはこう書かれていた。

『恋するカフェラテメモリー』

著…押舞おしまいヒカル

「お、おしまい……ヒカル……？」

なんだこの名前……日本人？ いや、名前だけじゃない。

この表紙、この画風、この空気感、どう見ても日本の漫画じゃないか。

「な、なんでこの世界に……漫画が……？」

手の中で、ページの端がかさりと揺れる。その瞬間、胸の奥がきゅつと締めつけられた。

思い出した。前世で、放課後に本屋で手に取ったラブコメ漫画のこと。部室で友達と回し読みして、くだらない恋バナで盛り上がったこと。

もう二度と戻れない、あの日々のことを。

それなのに今、目の前には確かに“それと似たもの”がある。

「アルドくん？ 何か見つけたの？」

後ろから声がして振り向くと、ブリジットちゃんが棚の陰から小首を傾げていた。

「あつ……うん。ちよつと、面白い本を見つけてさ」

「えへへ、アルドくんが興味持ったことは……すつごく変な本なんだろうな？」

「……そ、それは、否定できないかも」

照れ隠しに笑いながら、俺はもう一度表紙に目を落とす。

押舞ヒカル。

——やっぱり、いるのか？

俺以外にも、あ・っ・ち・の・世・界・か・ら、この世界に来てしまった人間が。

そう思いながら、俺は今度は本を開いた。

◇ ◇ ◇

「……はっ」

ふと我に返り、ページをめくる手が止まった。俺は目をしばたたかせる。
な、なんだ今の没入感。危うく本の世界に完全に入り込むところだった。

『恋するカフェアメモリー』

——この本、すごい。

設定や導入そのものは王道だ。けれど、作品としての完成度がやたら高い。

絵が上手いとか、登場人物が魅力的とか、そういう一言では片づけられない。

ちゃんと“熱”がある。

描き手の本気みたいなのが、そのまま読んでいる側に伝わってくるのだ。
それに気になったのは、この作品の内容だ。

そもそも、この世界に漫画文化らしきものがある時点で驚きだが、それだけじゃない。

内容はいわゆる異世界転移もの。どう考えても“あっちの世界”の作品だ。

この作者、やっぱり現代日本人じゃないのか……？

そんな疑念を深めながら、またページをめくろうとして——

「あっ」

俺はふと、ブリジットちゃん存在を思い出した。

やば……！俺、かなり長いこと立ち読みしてた！

慌てて顔を上げると、棚の向こう側に彼女はいた。

少し離れた場所で、静かにこちらを見ている。そして、にこにこ柔らかに笑っていた。

その笑顔を見た瞬間、胸の奥がじんわりあたたかくなる。

「こ、ごめんね!? ちょっと夢中になっちゃって……!」

俺が慌てて本を戻そうとすると、ブリジットちゃんはふると首を横に振った。

「ぜーんぜん大丈夫だよっ!」

そう言って、ふわっと歩み寄ってくる。

「アルドくんが楽しそうにしているの、見てて嬉しかったんだ〜!」